

重修真書太閤記

九編

四

和書門類			
三四五	二六	一三	四〇
號	函	架	冊

內閣文庫			
三四五	四〇	一三	一七
號	冊	架	函
和書類			

內閣文庫		
番號	和	34053
冊數	40 ( 14 )	
函號	171	45

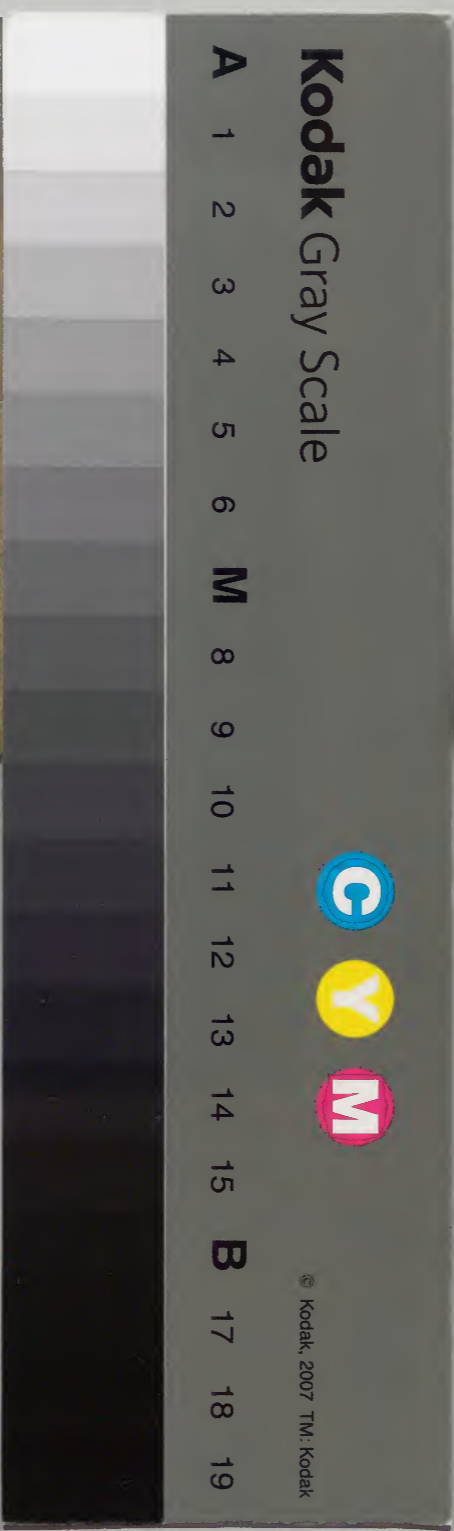
新刊納本

第十

家傳

晴

共四十



重修真書太閤記九編卷之十

織田信孝濃州没落の事つへは、  
柴田滅びて越前平均、佐久間虜られて加賀闕國  
となり、あうい筑前守入國ありて織田社とて、め  
白山平泉寺石動山其外士農工商と安堵をせしめ  
之ハ皆万歳と祝して御禮と申し爰も三七信孝ハ  
濃州稻葉山瑞龍寺岐阜三城に楯籠りて羽柴美  
濃守の執權藤堂源助高虎三好孫七郎の家老皆川  
山城守氏家内膳正と始二万餘人よて攻しうとも  
北國勢三万余人よて江州柳瀬よて出張とてと聞

城堅固し持ひこへびるる寄手も責めくこ  
て見えし處は天正十一年四月廿五日の暮方美濃  
守の家臣小川下野守走來り馬と城近くなり止大  
音揚去廿一日の戦は北國勢敗軍し佐久間玄蕃元  
柴田權六兩人を生捕廿四日申刻より北庄落城し  
柴田夫婦とも自害しつゝ北國平均して筑前守  
の手に入たり然し誰か當城を見繼可申哉籠城の  
面々何と目當り休えぬよ早々出城ありて然  
るへしと呼ぶるは城中よきの寄手の謀あるへし  
と疑ひありし敵陣へ恐ひしと入て聞しるよ柴田  
滅亡相違あり然らば當城は在て運と開くへし道

大層言ふ終る一

一

あしとのひ定め齋藤玄蕃龍之稻葉刑部貞之岡  
本五右衛門安元りつとも城と脱出降人よなりけ  
るよるり城中以外の外は騒さ立りる廿六日追手  
搦手六万餘人よと攻りる稻葉山の大将團平九  
郎政之國分佐渡守堅固に防さしりとも士卒大形  
落失しりる平九郎政之生年廿二歳切て出能戦て  
討死と兄の平八郎は去年六月二日信忠卿の御供  
よ戦死とり兄弟共よ無双の忠臣といひつべし國  
分佐渡守も能戦て討死しりる生年四十五歳とり  
や瑞龍寺よの織田新八郎信包峯信濃守平田壹岐  
守一万五千餘人よと籠りけるり次第よ落るをけ

大層言ふ終る一

一

るしつり手勢ひつりしと引具し岐阜へ掛入ひし  
 瑞龍寺の城ハ自然と空城なりし又岐阜  
 城ハ三七信孝新八即信包二人大将を籠りけ  
 ると寄手六万余人をして攻むるより城兵段々落  
 失くつりし千餘人なりし此勢をて一戦し  
 討死をんと切て出むしつりとも寄手たて遠失し  
 射て敢て手痛く近付もをさうけるより去り城  
 へ歸りて腹切んと味方とみだり二百余人をかり  
 ぶり寄手ハ筒井順慶家臣松倉右近等尾宮内  
 城際へ至りて申けるハ當城の体落去遠く見  
 受けし御開城あるは左にハ順慶急度

筑前守よ申勧め一國を進申の様取扱ひ可申ゆと  
 述べしハ三七殿の仰らむける様我柴田と共に約  
 束をてあり然る柴田約を守りて滅亡ハ今ハ  
 至りて我も亦黄泉と趣と勝家と面會し共ハ故  
 殿に仕奉らんと思へり何の面目ありて猿面即の  
 處分と受一國の主とせらるるはと云て聞入あふ  
 氣色もはらうしと家臣等志さうし一先御開さあ  
 りて又思召立あふともあるはと爰に御生害を  
 の詮無と勧め奉るもの多うりしハ忽ちたのひ  
 へし然ハ尾州の方へ趣くハと有て諸侍は  
 の間の苦勞と厚く禮謝あり各りつとへり共退

散あるべしと宣へいおのひくくは落行けりさての  
ち三七信孝新八郎信包諸士五十餘人と召具し城  
を閉り尾州知多郡野間の内海へ至り大御堂寺よ  
入て閑居しあへり

野間内海村並村大御堂寺真言宗長野万徳寺末  
なり此寺よ左馬頭義朝鎌田政清の墓あり信孝  
墓ハ塔頭安養院あり右大将平朝臣浄岸大禪  
定門神儀天正十一癸未五月七日と記と一  
位牌あり

三七殿の附人よ栗田彦右衛門といふ人の心替り  
しと信孝の御前よ出申けるハ筑前守の下知と一

て此邊中て討手の向ひひなる雑兵等の手よめ  
らとあをんとささう織田御名字の恥よ御座ゆ我  
我防よ可申し其際よ御計ひひとやと申けさハ  
三七殿さてい欺りさし口惜ゆとて腹と切ぬハ  
ける刀の血やとらし床よりけたる墨梅の一軸  
へさつとめりしとらし其墨梅今よ此寺よ傳く  
と信孝最期よ

いしとらしとらしの野間をこい報とよとらしとらし  
と詠しととらし果あ入生年廿六歳あれと見て新八  
郎信包ああし腹と切ぬハ今まて付纏ひたる  
諸侍いつとも思ひくは腹と切てけり然るよ栗田

彦右衛門ハ信孝の御首と酒と浸し同意の者とも  
同道して京都よのり浅野彌兵衛と付て言上を  
しつゝ筑前守大に驚かす歎かすひ我天下の為と岐  
阜の城とハ圍つことと正敷王君の御胤とす  
やのこハ城責ともの心と近々とい寄もを以只  
遠巻よあさく随従とすのものと掠う尾州へ御退  
去すしあは様と計ひしつゝ何とて御生害と勧め  
奉るつこと然ると附人の身とて助け奉らんと  
ハを以却て御自害ある様と謀りて御首と持參を  
心休實と以て人面獸心とやいん人非人の不  
忠不義の世の見あらしよせよとと栗田以下六

人のののど信孝の墓の前と磔とけりて心地  
と皆人悦ひ秀吉の計ひと感へけり然と七  
本鎗の面々と新知五十石と賜らり其上と感状と  
添あへり

浦庵本と感状と載たりそのこといよ云く今度信  
孝對某及稔楯有可亡秀吉企雖為前將軍信長公  
ハ御連枝今也不去西葉可用斧柯事在手裏殊柴田  
又修理亮瀧川左近將監與被仰合之儀決然也依之  
至濃州大垣之城令在滯可攻伏岐阜之城之處柴  
田之先勢柳瀬表致出張之旨告來之条不移時刻  
走歸於柳瀬決勝負之刻竭粉骨合於一番鐘突退

群雄北國勢及敗亡事偏在尔之武功矣加増領五千石令宛行者也仍感状如件

天正十一年七月朔日 秀吉判

又加藤虎之助の主計頭同孫六へ左馬助片桐助作へ東市正平野權平へ遠江守糟屋助右衛門へ内膳正脇坂甚内へ中務大輔福嶋市松へ左衛門大夫と改めらる石川兵助貞友り母より金銀若干賜り懇し追福と營すをゆひ五月七日佐久間玄蕃元盛政柴田權六勝久兩人と誅せらるへとの定ありよら洛中と渡し其後六条河原にて生害あるへと由なり奉行へ淺野彌兵衛尉長政とを權六郎へと

ひ痿とて是非及るる体骨髄と徹しと見たり玄蕃元盛政へ中川と討取しのち勝家の下知し任を早速本陣へ引取る何てこの期及らんや戦功を全くと上方勢と侮とへ秀吉と我とくそんめのと果報のしと筑前守りかといひしめ浅野彌兵衛尉のれと聞其方今らと臨と何のたことと云とゆ其口と念佛とをも題目をも申とくと云と笑ひしと玄蕃元聞て彌兵衛たよりと聞との方あと足輕の作法の知たるあらん武士の志と知るととけと詮あ木といひあゆとも語りて聞とんらとけと昔保元の軍破とて

鎮西八郎為朝平治の合戦も勇猛の聞高か  
り一悪源太義平何とも八幡殿の孫彦あとも面  
縛の恥逢ふべり盛政一人のくる身とありよ  
あつた汝等もあつた川我如く敵も虜も時  
あつたへ其時思ひ知ると云つ料紙硯を請て  
世の中とあつたもつたぬ小車い宅の内をい  
佐久間玄蕃元盛政生年廿九歳と記敷皮山居直  
うそとつくと首と延て討をけり權六郎勝久ハ十  
七歳とつた盛政ハ古大學の嫡男母ハ柴田勝家の  
姪とつたこれハ勝家とハ叔父甥の間とて別て親  
めりげるとつた加州金澤の城主とつた其富其勢

との勝家の養子伊賀守勝豊の上と出あり然  
るも斯成果つた二人の首と梟木とつたけら  
流布本玄蕃元と石田三成と口論と由と記と  
誤あり三成とつた廿一歳のまゝ元吉といひ  
頃ありつた奉行の列とあつた  
又勝家の妻と佐野と云女あり是ハ佐野源左衛門  
尉常世の末孫と六郎と云一の女あり六郎元  
ハ上野の國の住人ありけるら流浪とて越前とい  
たつた勝家不敏と思ひ召抱置とつた六郎病死と  
しつた其女と勝家の許と養ひ置終つた妻とつた男  
子と生とたつたも存とる昔ありとて披露とつた三



之助と名付中村文荷齋と以て幸若村よめく養育したるげと勝家おのひ出し自害の前よ彼佐野よ云ふくめひそり城中と悉ひ出さ幸若村の三之助り行衛と尋ね柴田の家系と相續さをもと厚く教訓し北庄を落したるなり

幸若大夫事 并柴田の妾佐野柴田三之助よ過事

越前國大野郡よ幸若大夫といふのあり聖徳太子の御時百濟國の味摩之傳え伎樂の舞を以て家業とひせよは是を舞々といふ如何ある幸若といふと其家筋と尋ねるは桃井中務少輔直

和都の軍よ打負おの越前國へ落來り大野郡よ忍ひ居たりげさる舞々大夫の娘よ相あれ一子と産しめ幸若丸と名付けり中務少輔ハ二度軍と起して都よ上る外祖父ありける舞々大夫幸若丸と愛しそ育て終よ我家と譲りてけり兎角とるゆとよ幸若丸も成人して父と尋ね都よ上り能軍功あましくひありげさる桃井宮内少輔直詮といふ然る直詮のまき幸若丸といふはら松田といくる舞大夫の娘よ親し一女一男と産とる女子ハ松田り嗣とて婿と彌次郎とも幸若丸の血筋なりといふことと知さんため幸若の彌次郎

とのひいなり男子ハ桃井式部少輔直繼といふそ  
 の子右京亮義繼その子式部少輔義矩その子と幸  
 若八郎義安といふ是よりして桃井といふはその  
 子八郎九郎義重木下藤吉郎と親しくりし越  
 前責の時朝倉の調略と聞出し告知を忠節あま  
 り信長公と御目見し長光太刀國光刀并し若狭益  
 と拜領と柴田入部してける時幸若由緒と申て侍  
 ぶありしゆとあひつととも柴田ハ羽柴筑前と  
 親しく幸若あれの聞漏して居りけるは彼勝家  
 の妾佐野り産し男子と中村文荷齋り才覺よて此  
 幸若村の舞々七九郎といふの預け置金子あ

かの取をけるふ七九郎甲斐く養育し三之  
 助と名付置しふ七九郎夫婦あ病し侵され終よ  
 死亡し残るハ三之助只一人の幼稚のときより  
 如何とも為し様なくあは居たる處よ七九郎  
 の甥ふ友九郎といふのあり三之助と引取養育し  
 つととも元より心よりぬののほとい文荷齋り  
 許し行てさあふく偽り金子と貫ひあとしくめち  
 三之助とハ八郎九郎の許へ誓古のためとて預け  
 置その身の何方ともなく逐電したるけり元より  
 孤のこていあり誰ありて問音信のものなり八郎  
 九郎許し實りある年月と送りけるは勝家氣比

宮へ参詣し國中のののど召集藝能と盡させける  
 時幸若も始て勝家を見参しけるも勝家幸若と近  
 く呼て盃と與ふ幸若つくと勝家と見こみ我家  
 へ養ふ三之助よさも似たり宅へくつり三之助  
 と呼出し見さのののど目鼻もつくと耳首の  
 の格好よく真し同くわうけし由緒もありや  
 尋ねても友九郎へ行衛しとて三之助  
 年と取れ従て力をく打物取て達者なりつと  
 も由あるののの子なるべしとて計りて強  
 穿議もをへその内は北庄落城して柴田滅亡と  
 ぐは又おのひも出さば然るも勝家の妻佐野へ勝家

の遺命と受て城中を紛しとてそあつと  
 辛足は垢つと穢れつれ近なる人も  
 端の夜とあり田屋の藁生よ疲と休め越前一國  
 經めくると幸若村ありし時ハ心神とも小勞  
 ととて一歩ハ進み一歩ハ下とあまう詮方あるま  
 ずよとある杜の木蔭より行くとあ一方行末とあ  
 ひ廻らしめと見さののど年奮したる石  
 の宮ありのり御神りの知ほとも尋ねる若君  
 世よ御行末と守りかひ妾息あるう  
 ちと廻り會とあへりし此世よま

御墓所と知とあへりあへり尋ねまいらをんと心の内よ祈念しつゝ念に疲れてまゝとろめい正しく我子と廻り會ひ嬉しむとあひのひしへ只是一場の夢にうゝうゝの總身ふ汗とやうしつゝ石の宮居ふ額とつゝ又めのくるはく見つゝよけりめらる處へ三之助何とらうやく來り見せし疲と下女の神と祈りて物くるこゝろ若君の御行末と守らとあへ我子の消息知とあへと云との葉の耳ふ入り三之助子心よ我身も孤なりうのうなる人の子ふうあらん母あへあへの如く尋ねせん父あへ父の素生と知へるよあへれ此狂女の尋ねるは如

何ある人よあへりあへり尋ねまいらをんと佐野うろたたる傍に進みり御身の誰たのぬるへ何人をと問きて佐野の眠氣なる眼とあへ拭ひ三之助と見あけ見おろしたるう見ると修理進とのふ生うつゝそのめのこゝの聲音まよく正しくその人よ逢らうちのせらるるふり忽ち秘すちささるるささるるものこゝ少入り我身も尋ねるこあり御身の年いつつ名へ何とのちるるやらんゆゑ御身の父の名と七九郎といひんさるるゆゑいと三之助もうち驚さるるゆゑ我身の父の七九郎今いなる人となり母ふさへをてよ別きて

今いなり何として我身の父の名をい知あふやらん  
あまりの不思議とむつりまのその七九郎といふ  
名というとどうも覺てありなう何處の人とも聞  
さうさ御身の年の十二歳とありつらんといふれ  
て三之助と驚さういふも十二歳なりと答ふと  
の龍の腕は黒子あるん足の裏は黒い疵のある  
さよといふ三之助と肝と潰しそれすれ知  
つる御身の我身の何とすやれそ母とあつら  
しうれは佐野の涙とあり然れ我子とあるもの  
と尋々て千辛万苦さても只今告あふ正夢にられ  
いる宮居の御神のこち引あふとお知らせさう如何

六段言の巻終

三

ある御神り覺束あし若君は此姿と名乗あふも  
くつりしと肩よりけさる編草といひ縫箔したる  
縮小袖さつと著りへて坐と正しあれは越前の國  
守北陸道の總管領柴田修理少進勝家公の末期の  
めと遺言状とあつら御身の父御なり今やそ  
の父御七九郎いりうり養育うけしすれとも勝  
家公より多くの金銀送りあへハ養育の恩ハ金銀  
よてつくのひたり今より眞の父御の心と繼天下  
ふ武名と顯くしあへといふれと三之助佐野をう  
ち詠め左様の事り眞實あり我身の種性正しこの  
のさういふ黒子の疵の證據と似て證據とあり

六段言の巻終

三

ひろとてうり対し御身の子といふあるしありと  
 おりて三之助の利發のたまりおあれらるる  
 譽の侍の強ゆる氣性と佐野の悦ひ水飲のため  
 用意を盃御手洗の水と汲とり守刀を抜取て  
 子指と突切血と出し盃の水を入り三之助の指  
 の血とそとさし不思議の一川に混合しけるよ  
 り三之助も疑とてうりて母御前我子の  
 若君と互し手し手を取てふとてやあり  
 て三之助とて改め然に我父の柴田殿とて御身  
 の母御前のまて筋目るさ舞々の子とおのひ居  
 つるよりのやうさる我身なり此上の亡父の遺

状の旨に從ひ共天と戴りたる仇の日の出の秀  
 吉のうりて天下と經歷て武藝と修行よその  
 上よて本意と遂て修羅の苦患と休めんと佐野の  
 ろともふ身と起し立退んとてけり又思ひり  
 へし今よて養育されつる幸者八即九即無沙汰  
 をんも道ありと三通と認め幸者のめはく送り

けるその文は  
 我等事永々預々抱ひ御恩の高く深きことたとへ  
 へ蒼海も猶あさく泰山も却てひさしく然る處  
 眞實の柴田修理進の子よていへ何事をしひ  
 一時御身小殃のゆきゆき存いよ付て

當所と立のし申ひ万々仕合の事ゆゑ厚く  
御禮可申ひ恐惶謹言

六月 柴田三之助

幸若大夫殿御宿所

とあるけるよあり幸若も仰天緒の柴田の子  
うけるうあそろもく何様の合はぬも  
ゆるるへと下心の悦ひ下り尋ねも  
の八郎九郎の京大坂より参向す  
暁近としくひ二百石の地とさ  
重修真書太閤記九編卷之十終

重修真書太閤記九編卷之十終

佐久間兄弟紀州江落る事

并粉川法印諸浪人と誘ふ事

北陸道の總管領柴田修理進勝家その本貫は足利  
の一門斯波の一族として尾州の甲家あるを以て  
織田家よても家老の上首たり然ハ信長公も重  
のの用ひし諸將のつとも其下風と立とい木  
下藤吉即の苗字改むる時あの一宇と請求めし  
知とさう木下藤吉即ハその母を知て其父と知  
といへハ氏も素性も論よたは但その方寸の膽

畧と以て信長公の草履取り立身し長濱小谷の  
城主となり遂に羽柴筑前守と名乗山陰山陽十六  
ヶ國の探題職として別所と亡し浮田と降し毛利  
と威して三城と屠り亡君の仇と報し朝家を安ん  
し大儀の葬禮と勤め主君の遺跡と定む是等の大  
功諸將に超過しつゝと勝家深く是と嫉み如何よ  
もして此事と妨げんと謀りつゝとも諸將匠作  
の偏執として是と與力とするの弊し是に於て天  
正十一年三月より織田三七郎信孝朝臣瀧川左近  
將監一益等と共に筑前守と翦戮さんと約しけ  
る瀧川の勢州に於て筑前守の為に敗軍し三七

殿ハ濃州岐阜に籠るといへとも筑前守は押えり  
とて首をたし出し得と勝家江州に陣し賤岳に  
戦ひし軍利あり毛受勝助り忠死しつゝと  
つゝと身と以て遁し佐久間玄蕃柴田權六ハ虜ら  
と勝家遂に北の庄に籠りしも不日没落しその  
身死して國滅ひ所管の北國をへて筑前守は隨ふ  
是天時人運の然らしむる處といひし功と  
妬との差分知しつゝと爰に佐久間久右衛門尉安次  
舎弟源六實政兩人ハ賤岳の圍と切腹せしり勢  
州に落行終に紀伊國の那賀郡根來寺に隠  
居たりけるその頃粉川寺の三智法印と云ハ



母方の叔父なりと以て兩人とも粉川と趣き法印  
 とたのむと世と忍ひつゝ賤岳の消息と聞し勝家  
 敗北して越前亡し北國平均して筑前守より従ひ兄  
 玄蕃九弟權六郎の虜として六条河原より害をくす  
 由るに無念ゆるりいふもさす伯父法印より向ひ  
 我等兄弟めく世と忍ひ天より脊とくくめ地よぬと  
 足して隠し居ると只命とおしむ故と御推くりり  
 も恥くりくくへとも賤岳の軍利る味方の勇士  
 多く戦死し重代恩顧の者去ともと存をいの追  
 落失ていよもう一方と切抜戰場をのうれ二度軍  
 と起し會替の恥辱と雪めいむんと今日追も命を

たむひい然るに勝家自殺して北庄滅亡し北國平  
 均し筑前守より従ひ玄蕃九弟權六郎も筑前守のた  
 めに六条河原より誅せし由たし承りりひ  
 斯てい我等誰為し義兵と揚へし時と知し然ふ  
 めの件の人々のためし一戦を企て修羅の妄執を  
 ちりし申さんと柴田重恩のの共を語りひひま  
 つつとも秀吉の威勢のあつてんと同心と  
 ののもろくは毛受勝助の勝家よめり忠死を  
 して芳譽天下ととろろ其外北庄より戦死を  
 小嶋若狭守父子松平甚五兵衛父子松浦九兵衛吉  
 田藤兵衛父子ありひし同姓十藏あんと取々よ名

と揚譽を傳えいし我等兩人の戰場をらつしと命  
とれしむめのと他人の嘲らむの事實を以て残念  
至極の依て自害仕り今世よある修理殿を  
め兄玄蕃殿以下の幽魂に申訳をせよと存し定めし  
と涙を流する口説いし粉川法印ものりし  
西人とあひつくと打守りため息繼て申けるは叔も  
叔も人の運の末まの智恵の海淺くなり心の燈暗  
くなりぬと承るなりぬ實もく偽りていなりけ  
り其方二人の尾刈よても名ある侍ある上弓箭を  
握ても多く人に譲らぬ一方の固めと人も許さ  
りのあるう左様と腰の抜しとこと不思議ありと我

大問九編卷十一

三

等の出家の身あるとも其方二人とゆき置  
めよとの命とい無めのとわのひ定しある是と見  
ゆる兄弟共といひつて佛壇の障子と開けり過去  
法印三智と記をし位牌あり兩人とさ來る涙とれ  
さへめく追思召切ありて我々と御抱の糸のの  
代より報し奉るへさ然とて我々今身の身と  
如何よをん出るも入るも兄弟二人と云は法印あ  
る笑ひた様ある心あるの腹切てあんど云甲斐  
の事とをわめひ付ありて我等の其方共の落來り  
日より鬼とて角とてと工夫を凝しとありし  
其次第の抑河内國の三國峠霧坂の城代羽柴三左

大問九編卷十一

四

衛門尉吉長八年若くして柔弱の隨身の奴原一人として手立りのあるへうに此霧坂を乗取て楯籠の要害のふし小勢も一月半月のちころふべし南河内の長野烏帽子形の城に織田源五郎長益居あへと臆病第一の性質ふを急に出陣して手と合をともあふし然拙僧の扶持ト置處の浪人百五六十人あるへし又粉川の地下人より頃息と加えしめの二百餘人いたしありそれらう一類眷屬を催促したるのや二百餘人いあるへしその外は三好松永の殘黨とより集めたる是も二百餘人いあるへしなりさうの都合六

七百の勢ありしに署到と付しとて筆取呼寄書記とて大内義隆の家臣松弾正が孫松弾正左衛門尉關東上松房能の老臣山谷周防守國實の孫山谷伴大夫國延三好家の浪人下掛兵庫同左近少允朝倉の浪人中嶋刑部右衛門尉同平九郎三段崎玄蕃頭の子孫同忠七郎村井長門守の長子同長左衛門尼子勝久の家臣カ石刑部少輔の孫同小平太久繼松水彈正の家人鷺岡十郎兵衛貴崎主膳のこころハ皆信長秀吉と怨むるこの深さのの共なり此外ハ明智ふ仕えし丹波侍山口本山本庄木戸園部田村内藤あとのふめの六七十人ものとも秀吉と討て亡君

の恨とくるげんとおのふの共なる其勢合せて  
七百八十餘人佐久間兄弟大なるこひひの霧  
坂へお寄一合戦して城と攻抜んと勇立と法  
印印のどめ如斯義兵の集る上の何条をこく  
おとへげんや我は一川の謀あり一手よの佐久間  
兄弟と大将と小を貴崎主膳以下大和河内の浪人  
二百五十餘人佐太枚方の間と埋伏とを一手の村  
井長左衛門下掛兵庫と大将とくく百五十餘人  
郷民共とさ一添霧坂山の東の谷際なる林のけ  
こめく置鐘大鼓と打て味方の氣と助けとを  
よ一手の拙僧大将とくく三百餘人の霧坂の搦

手より切入へ城門に至るころ會圖とありけ  
この佐久間兄弟大手より進こ入へくと約束一叔  
鷺岡十郎兵衛と淺野彌兵衛と組下黒川丹下と云  
のの出立とたり但急用の飛脚あれ郷民七八人  
と先よりしらを鐘持草履取りつめの如くよひ  
りへたこの路次の百姓原よのこるすて宝寺より  
何ある急の飛脚やんとおのふとくうよと實め  
のなるとんこの氣もつる路とゆりてめさる  
つ其駿足と感しけり又松彈正左衛門ハ農人よ  
身との川霧坂よのこり羽柴三左衛門尉城と  
出るよ見たよ直よ味方よ告よと定め山谷伴大



ハ蠅取蟹の栖と弓の弦ハ天龍の句ハ絶て鏃  
ハやあらひに鏑付たるさまをを目ハ無用心と  
あつてはもとも其主の心ハ是も秀吉の威光  
結句手柄よりたりけりめくる處へ城の南より  
砲烟と蹴たてて飛脚の早馬より來り城門際  
馬のりこゝし是ハ山崎宝寺より火急の御使より  
と呼びけるより三左衛門尉即等東条武大  
夫佐原清左衛門あれと聞付何事をとのへ是ハ  
淺野彌兵衛組黒川丹下より火急の御使太事  
口狀人傳より申入りしことより三左衛門  
尉よりと通しけりしを此方へとつみあ

武大夫清右衛門案内と書院より請とれハ三左衛  
門尉立出何事の御使と問ハ丹下さんハ密々の  
儀なれハ彌兵衛と存知をいたし三左衛門尉殿  
早々御参あるへとの御説より何なる急用あり  
とも打とて宝寺へ御越へて然るへと彌兵衛吳  
吳申てハ其上口狀申早々ハ早々引くへ  
と是中ハ彌兵衛のさし圖みハ早御暇と黒川の元  
と道と引返と武大夫清右衛門一同ハ使者の容  
子いりも火急の事と承えハ遅刻あらハ後日  
の難義ハ御發足と承えハ三左衛門尉  
取めのもの取あハ馬ハ打のり馳出をハ武大夫つ

川を以て供たりたり淺野の組下黒川丹下は欺むる也  
三左衛門尉庄從思慮なく霧坂の城を出室寺へと  
遷たるは武道とのまじりて城を預る故實を知ざる故  
なるべし黒川丹下と名乗るは粉川法印の手の者  
よと驚岡十郎兵衛なりとの神ありぬ身のいりく  
う知ん哀まじりたり次第りふ十郎兵衛霧坂を引  
返す三左衛門尉出城とるや否哉山谷カ石のめめ  
共より佐久間兄弟并に粉川法印のりてへ斯と告  
知をけむの今まて處々埋伏したる軍兵ともい  
つとも得物くを提げ佐久間兄弟も從ふて霧坂の  
城よりさう是は宝寺より秀吉御のさし圖として

當城加勢のため罷り向ふていとひひしうの佐  
原清右衛門立出られと見るといつとも羽柴の印  
付たる法被脛切者たりけるを以て敵ありとの夢  
あも知を引入て爰やうしこへ引を彼是ととる處  
よいつとも知を相圖の狼烟とある一發とる  
と俄に山谷も震動とるらうらう鐘を打大鼓をたて  
る螺とるる鯨波ととのとあひ數百萬の寄るら如  
くおひたれしあひ何事と驚く處へ村井長左衛  
門下掛兵庫大將とて無二無三突掛り城門際  
よ押し寄鉄炮と打ちけ城の扉と打破り佐原清右  
衛門あてとまとい士卒と下知しを防ぐんととれ

水月記元編卷十一

へ最初ふ宝寺より加勢の為よとて来りしものと  
 も城中とてしり廻り突てい切切てい突けるよ  
 う何とも敵つことと味方と定めり見合ける内  
 ふ多く城兵と打逃げり清右衛門あ不思議然に  
 黒川丹下といひしもの秀吉卿の御使よあるま  
 へ何ののなれい如斯くうて城主とおひさ出を  
 しよ是れとの計策とあはれもの小人数よてい有  
 へしり誰よあふんとあはれまよとひ本丸へ閉  
 籠らんととるを見て佐久間兄弟前後より追取こ  
 め突くことい清右衛門本丸へ入ともあしりく  
 火水あなりて戦ひしうとも實よ不用意の折よてあ

う防く勢の少し今に戦死とて一時節到来と思ひ  
 切てと戦あしりめく處よ搦手より粉川法印三  
 百餘人と三手よ分て面もあはれ切て入りあはる  
 と幸と振舞ふりよと城兵よ百五十人討とけり  
 三右衛門尉の宝寺よいり浅野彌兵衛尉と尋と  
 へ折しよ上京して居あはれを以黒川丹下といふめ  
 のと問へそれい丹波ののよて既よ帰國たり  
 といふ然に火急の御召何事と申出といひ石田左  
 吉立出て殿よい昨日より伏見の里よ知由して假  
 ん出あは深く忍くをあはれ由あはれ我々よものつ  
 くと定うよ知とあはれ如何る急の事ありとも申



上へと便宜ありとつゝ三左衛門尉肝を消正し  
 浅野の組より黒川丹下とのひの上面會仕り  
 それより申より火急の御用殊より密事人傳より仰ら  
 せと早々參上仕とどの御口狀と故馬と  
 らを神速し參向仕ていなり左吉との御戲も時よ  
 るる三左衛門より只今參上と御披露たのこ入との  
 三成眉とひそめとを不思議のこなれい  
 めよといふよ黒川丹下の四日以前母より重病とい  
 ふことよ御暇申て丹波へ皈る今日使より差つとい  
 くことより浅野の昨日の暮方より御所の御用より上  
 京したれい何とて左様の密事を取次つと但御邊

霧坂の城代より城代と云へ即城主も同一義か  
 り國の目の職のめより召遣ふ人と目代といひ  
 長官次官主典と四職のうち判官の職より充る人と  
 判官代と申あり然に御邊の霧坂の城を明ての參  
 上へ當然の勤を闕しと申へ此後とても左様の  
 御使あるは城を明ての參上仕りめと申  
 されゆへ但それらとの謀を行ふめより必定霧  
 坂の城より人より取とあひしる人氣の毒や  
 といとて三左衛門も大に驚と赤面して承られ  
 へ浅々したとてよその恥しと仰の如く  
 心元なり武大夫より引返をと下知しつ猶も左

吉小追従しつとよも御前の首尾を頼と申はと幾  
度とちり額つとてゆくて馬を引返を武大夫りく  
と聞らりも南無三宝ころらとてけりおのど何物  
とて我々と欺さしと思ひ知をんおのひしとと  
鞭と鐘と合をて馳たりけり霧坂よて佐久間兄  
弟飛鳥の如く振舞て前よ顯れ後よめくは鉄炮  
と打を畑の下より長柄の鎗の穂先のところへ突  
立よ佐原清右衛門今は是追よあおのひけん寄  
手の中へ切入て五七人と薙たよその身も數ヶ  
處手と負し一足も引は亂軍のうちに討とけ  
り佐久間兄弟勇もたち當城の主羽柴三左衛門と

の追出しその家老たる佐原清右衛門と討取たり手初  
り物とも進めと下知しつと終よ本丸よ切入三左衛門尉の妻子と  
捕て一間處よあしとめけり粉川法印の搦手より乗入三三の丸と  
切平け追手のよ見廻る處へ東条武大夫とを帰し何ののりよと  
淺々しと謀とて三左衛門尉殿とあひと出よその跡へつとて  
此は合野伏百姓ふんとの業あは何ののりよと名乗くよを  
めひし粉川法印大音あは淺々と謀と行ひよその淺々  
敷謀よのしらして居城と捨り虚氣のの三左衛門尉とれ  
よ從ふ雜入原大とて打捕のよもよとよ名もひよの  
の首あは溝堀と打棄たり其方ハ三左衛門尉の即等  
のよ何入のよと聞やとて武大夫とて

さうなら誰もうある名乗といふよ名乗もを決定めく野  
 武士強盗いふその義いふ手の下は打取味方とて  
 たど下りの供養おぼしめしおのめりしとてお退と  
 切てゐる法印とてと笑ひ其方共は逢て名乗てとて  
 あくはとも冥途の旅の土産よもをよとておのめりし  
 大慈大悲の心もういふて聞そよとていふは是は紀伊國  
 粉川寺の三智法印とい我事もうといひつる長柄の武士  
 と左右よ立武大夫とめりて突てくる武大夫は粉川法  
 印と聞もうも悪し法印只一打と十文字の鑓とていひ  
 しつる法印は長柄とてとめりて武大夫と取とめ責立てる  
 佐久間兄弟うくと見るもう馳來り東条よ切てうとて

東条進んと法印よ近づくと法印とて見て推參いり下臈めと  
 いふ聲と共に搔つら目もうも高くさう上てうんとつひつ投  
 いま二丈計と打とつひつり立たる寄手の中へ打とてたり  
 何ふ以てたすうとて手取足取散々よ切刻と形も見へるありよ  
 けりありのちの城中よ手よたつめのいふけり城戸く  
 とさうとて討死とて死骸とてほけ掃除とて法印本丸よ入  
 とまよとてそのち人数と改めけるよ七百八十餘人のうち七十三人  
 討死とて其外よ手負い五十餘人とう敵と討取し負い二百余  
 人と記しける中よ佐原清右衛門東条武大夫う首とてうへ大手  
 の門よ切うけとてあり

一書よ霧坂合戦天正十一年七月二日の事といひ大坂城普請

しつめの頃、秀吉卿の多事ありて見て、粉川法印事  
と起り、なりといふ杖弾正左衛門霧坂山より敵と討事  
十三人誤て深谷に落し、一夜経て城に入、猶十三の頭と云ふ  
さへ人の事と以て、その勇と稱せり、と申山谷伴大夫  
の敵の馬と奪ひ、半途より出て三左衛門尉の宝寺より  
歸ると待けり、三左衛門尉伴大夫馬と見知り、味方か  
らんとちりひ近々との寄伴大夫より肩ささと切られ  
て逃のひいとつり、是等の事本書に載と但土人の口  
碑に傳ふる處あり、因て爰に記して他日の校成とす  
り

重修真書太閤記九編卷之十一終

重修真書太閤記九編卷之十二

佐久間兄弟佐太の森合戦の事

并羽柴三左衛門尉宝寺へ落る事

粉川法印のたのよやく、霧坂の城と乗取佐原清  
右衛門豊秋、東条武大夫定秀と討取城中の掃除  
て城門の支配と定め、丈夫に籠りける、佐久  
間兄弟進み出て申様御計畧の通り手間ひまうけ  
を一城と打破り入替りの事、比類ある高名へ申計  
あぐいへとの勝て、兎の緒とメると申世話も有  
又、燈娘蟬と窺へ、後、燈娘と窺ふののありと

申す羽柴三左衛門尉の家老東条武大夫と  
討取ていへとも三左衛門尉と討漏し  
是ハ三左衛門尉宝寺へ引返し加勢とたの  
来るあゝん我等兄弟佐太あゝり打出途中  
て是と討取可申と存付ていと申を法印  
も思ひ寄たり急と打出あゝりと三百餘人  
霧坂もいもい揉て佐太の御ある天神の森  
けいも伏たりけり又貴崎主膳山谷伴大夫  
と付て同じ處に長蛇の備りともいめくとも  
知と三左衛門尉吉長石田左吉も心付ら  
し引返しいりあゝりよ心許なくたのい

途中より東条武大夫と真先騎をたけり東  
条下部息も繼あゝい走り来り三左衛門尉と見  
る路傍よりいこちより申ける何者とも知  
数百人霧坂に襲ひ来り只今落城に及ひ主人武大  
夫并に佐原清右衛門と討死仕りいと注進ハ三  
左衛門尉と聞仰天しものものを相従ふの  
の三四十人ありとりへともいものも出仕の供  
まへ素肌のものいみして物具したるもの  
人もい如何とんとあゝり立たる處を見  
と貴崎主膳山谷伴大夫百人の士卒と二  
引分関波と作りて推寄あゝりいを攻付たり

三左衛門尉の中間に持とて鎗の川より寄手に向  
ひ何れの所を以て狼藉至極の振舞定めて此邊の盜  
賊ひるゝの類の糧に困るともとんぐとあるこの業と  
いふのへとも悪し一人も餘とまゝ引包んで切と  
てよと下知じる儀勢の猛けきと我一人真先うけ  
んとりよりのものなり其間もや二三十間なり  
時耳の響く鉄炮の音よつとて餘多の人数螺を  
吹鐘太鼓と鳴し鯨波と作りて寄來る三左衛門尉  
おらしく驚さうとんとん宝寺へや引返ひとも流  
石よ口惜し又うく迫近く寄られぬととも脱を  
やうとひのひ切盜賊とも不埒なる命おしりく願

の筋と申出よ身不肖なれと天下の御後見羽柴少  
将秀吉卿の一族よて羽柴三左衛門尉ありつら様  
ふも取次て汝等の身の立行とらうらひ得させん  
と呼られぬ盜賊ひるといふとあり是は佐久間  
久右衛門尉安次同源六政實ありと名乗うけ叔父  
柴田修理進勝家并ふ兄玄蕃兄弟權六等の修羅の  
苦患と助けん為よ汝と打取んとありよ待と知さ  
る愚さよと呼らうとつと笑ふ羽柴三左衛門尉  
の元より臆したる性質あり佐久間と聞て大に怖  
と途と失ふて扣たる處へやこの響く鉄炮の音と  
共よ誰といひ知る百人あまう真幕よりけ寄て面も

ふらび無二無三つきたてと突立つきたてといひ三左衛門尉つきたてのふくあ  
 とてふらめつきたてと逃道つきたてと求つきたてむる處つきたてふ久右衛門尉源六  
 兩人鞍上つきたてふ立上り大将と脱つきたてとふ餘人つきたての目つきたてあうけ  
 を三左衛門尉つきたて只一人と生捕つきたてよとふゆと叫つきたてひうと  
 といひ山谷貴崎の人々大よ力と得つきたてあまうとこいりうとこ  
 といひ進つきたてと進つきたてつと攻立つきたてるるといひ佐原清右衛門つきたてう長  
 子同清左衛門澤井正太郎主人と助け命ととてと  
 戦つきたてふとつ佐久間山谷の手つきたてのののとこいり白つきたてげと見  
 えけると佐久間源六走來つきたてうとこいり敵つきたての素肌つきたてふ  
 ちうも三十餘人つきたてなりり撰つきたてと打つきたてようち取つきたてゆと大音聲つきたて  
 といひはとといひ貴崎大つきたて勇つきたてきたち羽柴三左衛門尉つきたて

と遁つきたてといひと誠つきたてと手つきたてあけく追つきたて掛つきたてける處つきたてと佐久間久  
 右衛門真先つきたてと掛來つきたてう粉川法印つきたての智畧つきたてより霧坂  
 の城つきたてのをてと攻破つきたてり東条武大夫佐原清右衛門と  
 の討取つきたて三左衛門尉の妻子つきたてといひ一間處つきたてと押つきたて込城つきたてと  
 の法印入つきたてのりたり其方つきたてとも今つきたての何處つきたてへ歸つきたてる  
 らとて降参つきたてると妻子と安堵つきたてさるとと聲々つきたてよ呼つきたて  
 くと聞つきたてて三左衛門尉肝つきたてと消實つきたてと霧坂と乗取つきたてと  
 たうんよの實つきたてと我身の一大事つきたてと彌つきたて十方つきたてよりれ  
 体つきたてと見て佐原清左衛門つきたての我父實つきたてと戦死つきたてとと然つきたて  
 ともやむく討死つきたてととこの父つきたてもあつたや  
 敵つきたてのそりりといひて我等つきたての氣つきたてとあとさんたあまの

ひつるうと又疑と起し何とよも此處を切殺その  
上の事とあめへとも此時日とて夕陽よりこむ  
るたはりのいり急くとも敵の前途を取切たるら  
ん容易く入城あひもよる其上實に城を取と  
た〜へ〜こへ行ても其詮あるま〜のりよやを  
ま〜と當惑の處へ佐久間兄弟とま〜なく箭と射  
うけ鉄炮と打うけひたせめ責付しうの三左衛  
門尉今は是追はうと思ひ切敵に向て切死と覺悟  
し佐久間う勢よめりける頃もや日暮と咫尺も  
しらぬ闇夜なり又あひ返しのける闇夜に戦ふ  
て名もふる下鴨と討とる末代追の恥辱なり敵

大目録の終り

四

も暗し心あ〜し〜幸手あ〜追も是れを究竟  
の仕合あ〜し〜落て見とめとあひ〜の髪  
うさた〜と息〜け誰とも知ぬ様〜と田の  
中の畦と傳ひ這々と渚楠葉〜一本〜と六里餘  
う息とめつろと山崎の室寺へ逃入て賈の使に佐  
久間兄弟うあ〜業城と粉川の三智法印と攻  
取と妻子のいのちも手あ〜逢家老二人戦死せ  
とあ〜のま〜注進は佐久間兄弟の三左衛門尉  
と見〜あひ安〜ぬとよあひ貴崎山谷と手  
配〜とあ〜ら〜と尋ぬと闇の夜の車あれ  
の終〜め〜り逢もをばた〜ひよ牙と〜と無念

大目録の終り

五



かり何處へ逃しう念入て探し求めて高名よせん  
と逢ていこころ別きてい又松明とあり照し木の  
影敷の内のとりやうとてゆく探しひきと  
短き夏の夜明とてりてまをとおの影もあし然  
るに三左衛門尉の即等と澤井正太郎佐原清左門  
主の行末見うしあひ必死とありて佐久間り勢  
めりり合編木の如き太刀と打ちあひて弓手への  
まの右手へとらり上段下段虎亂入奮迅獅子秘術  
と盡して罵つ罵つ戦ひけるさるへと敵よあ  
とこれい小高と岡よりけ上り是ハ羽柴三左衛門  
即黨の佐原清右衛門豊秋の子と清左衛門豊定

なり佐久間殿ハおとさぬり落るをあひしう父清  
右衛門のことと戦死と聞冥土の路のこととあ  
さひしくゆえんぞんぞや某も思ふ敵よめくり合  
討死して父のためと三途川の瀬あそと死手の  
山の道しるべ仕らんと存とるいりと云つて佐久  
間久右衛門と暗の夜あうう探り足ねらひありて  
只一突とつけとも佐久間り運はよく突つて  
佐久間よとて行あさる佐久間をりさば鎗を  
とめ手元よりり寄らりしと突清左衛門ハ突損し  
したり口惜や爰と逃さるあさるひめくり合り  
しそとあ退ととこり直と鎗の穂先の稲妻ハ光り

目々ゆゑ見へりし北國無雙の早業と人々知悉  
一久右衛門あれは二度の鎗とも突あやまち番々  
みとやうく立たる處へ佐久間源六を來りめく  
と見あり大音我を誰とぞ思ふらん鬼柴田と呼  
まし勝家う姪よ佐久間源六政實なりとさうとれ  
とあやまる聲と諸ともよ突出と大身の鎗よ胸板  
と突ぬりてあやまちへ佐原清左衛門朱よあ  
うて倒るるは源六とさうさ下立あやまちと首と搔  
てけり澤井正太郎の貴崎と鎗と合とけるう貴崎  
の六尺有余の大兵より澤井小男よりとあやまち素  
肌あやまちの打向あやまちとあやまちとおのひげん

あひありて逃出はと貴崎主膳の手よ持しものど  
取し心地しけるよあやまち何處も逃さど追掛たり

中川秀春霧坂先陣と望む事

并澤井正太郎水難と逢事

澤井正太郎の貴崎主膳よ追詰らむととよめりよ  
と見へりし搔ありて逃りて一味方と尋ねるよ  
或は討せ或は落失更一人もあやまちとさうと  
さうちみ敵よの勢よめく加らると見つけ篝火の  
影よめく耿々と照そひけるよとと臆病風よとと  
とと馬の平頭よととあやまち鞭をうちけるよ馬へ  
やうととさうととひ引りめく走けるよあやまち路もあ

柗原と何處とも知を歩くゆい正太郎の龍の  
袖柗の枝よめりて其身と宙よつるさるまの  
のつらゝ鞍の上もとさげらあまう馬のそのま  
走りて行衛も知をありよけり正太郎の柗の枝  
よめりて地よも着てまの幹の高く放とて  
り此より敵よ見付らまあい如何をんと思ふ心を  
かゝて脇差引ぬま柗の枝と虚さまよまのつと切  
いあいの不思議その身の水中へ落入つ水の流まの  
くゆくゆく丸木舟の如く逆ゆく水よ浮ぬ沈まぬ  
三四丁流まけり貴崎主膳の澤井と見失ひつと  
も詮方あけまの山谷佐久間よ廻り合霧坂さしと

引くこと澤井へとてよ水よ溺と半死半生の處へ  
柴舟一艘來のけりけるう澤井う流るゝと人との  
知と今日の軍よ捨たるものあま取上見んと手  
とのへまあらうと柗の澤井へとてよ同く手  
をのへ舟人の腕よつらとまらと付舟人肝とつ  
あまさまの溺ま人のつと流さんと手と放まの澤井  
いあめめと取付まあり互よ引つ引るゝ力あま  
う舟人も同く川へ落入たりう其後の如何よ  
なりけん知ののなり又三左衛門尉のあまひ宝  
寺へ入り入淺野は逢て事の始末と語りけるよ  
淺野大らよ驚まそれの敵よ欺りましとあまよ一

城と預る身のゆる敷次第り大將の御前何と  
ういふんと云夫しける處へ河列長野烏帽子形の  
城主織田源五郎長益の許より早馬來りて佐久間  
久右衛門同源六紀州粉川寺の三智法印と語りひ  
計畧を以て羽柴三左衛門尉と誘引出し其跡へ多  
人数おしよを終り城を打破り東条武大夫佐原清  
右衛門戦死し城の粉川法印入替り近邊を追捕し  
勢強大に及ひひ早々御仕置あるべくいと注進  
秀吉の事と聞あひひさもあるへ佐久間兄弟奇特  
み尤様の事と思ひ出たりささうの右衛門尉り  
子供りとあり然とて打捨おしへさあもあはれ但

大將謂り終り

秀吉の出馬りとの事よもあはれ蜂屋出羽守塩川  
伯耆守罷向ひひへと下知しあひける處に中川  
平右衛門進出でて申様兄瀬平清秀江州柳瀬表  
に於て佐久間玄蕃元為り討死仕りてひよあり  
幼年の秀春に家督を賜り某に後見仕りへさよ  
し仰出されひ佐久間玄蕃元弟よひへ秀春り  
父の仇との余類と申へくひ因て霧坂の討手と  
御奉公りしめよ秀春に仰付らひ様願ひ奉ると  
思ひ切て言上しひさの秀吉聞あひ平右衛門り申  
状充至極たり然しひさう只今蜂屋塩川に仰付ら  
しとて忽に御變替あはれんともいひ何と

大將記乙編卷二十一

九

めその品のあましくそののどと思召ひまの其夜蜂  
屋出羽守塩川伯耆守兩人とめし今夜の徒然か  
り兩人ともゆるりと著坐あるへくいと近習衆と  
以て仰らまひるまあり蜂屋も塩川も夜明あゝ霧  
坂へ向ふへまあり然ハ士卒の手配もありま退  
出とおりの處あまとも大将のりゆうに仰出さる  
ふと否今夜ともひひうぬいつまも遊々御前  
ふ伺侯とやまありて秀吉出坐しあひめつらし  
鯉と得たまの兩人の衆に振舞申たくりく引留  
しなり箸とりあふへしとて秀吉す引受く二三  
盃とつくりそのうち盃と出しあふに蜂屋の上戸

あり鯉の羹よこの名酒のりくたきまやじへや  
と云て盃のうど多く勸むまの自然と坐中賑まし  
くあるひの唱ひすこの舞ふたりけるのちあ  
ひ打らげたまひあま迄酔まげり塩川伯耆守の  
下戸なりつまとも強てとてめられまあまれも  
酔くつとまてうちあたり夜明あんととる頃ま  
兩人とも起出て水とを顔あゝひのりよ出羽守今  
朝の霧坂へ向らんと存とま夕の酒ふ時刻と延  
とまこのくまのまのまの遅くま早打立んま  
りとて大将に御暇申さるゝあまたりと後日の  
咎もありぬへしとて大将の見参ま入んとつら

近習ののの立出両将よりとや酔のさめぬより大  
 将の夕の酒のめく廻りてや今朝のりまの雷の如  
 きいひさうのて眠あつり何れとゆりあつても  
 起あふへさひしと見へる西将の發途も大将知  
 るとぬといあつりあのもち出立かひあの後日あ  
 何と申さるへ今さむ御待あまといとさむ  
 兩人も近習衆のりあつり從ひ相あふりあつり  
 傍の障子のとさむと見あへる柳のつら置あつ  
 へ越前の雲丹のつらあつり立ちあつり上戸のつら  
 なる柳の口とさむと見るさむとや呑口もさむとあつ  
 只一口と盃さむとさむとさむとさむと雲丹の瓶ひさむと

ろれと試むるよその味のよめつひあつりけあも  
 大将あけんむる料の品あつり並々あつりぬも理  
 あり又一盃とさむとさむと終る泥の如く酔  
 たりけり伯耆守の飲されと出羽守一人と誤せり  
 といとせんも同座ありて云甲斐なり然れ我も  
 のむへととおのひ切塩川もあつりひ盃とり上て  
 られも同じく酔たりけり折しも河州の早馬あつ  
 波とあつり霧坂の料川法印佐久間兄弟近郷近村  
 と押領しとさむと御大事と及ぶつり御征伐延  
 びゆとさむと此邊の諸浪人野武士又のあつり共  
 馳加つり人数もさむと多く相あつり可申ゆれい

大階記が綴巻十二

十一

御手當も容易よりましくいと注進され引違ふ  
 狭山の野里十郎左衛門尉一族所從五百余人もて  
 霧坂へ押寄合戦と催ふ所の處城方強くして野里  
 手ののの二百餘人討ち百余人手と負て引退く急  
 る御加勢と差下さるく十郎左衛門尉先陣仕  
 り御案内可申ゆと注進と然るも秀吉卿ハハハハ  
 眠りて起むと討手と蒙りし兩将ハ二度酔てた  
 らひひり起てハ倒ちけてハそのまのめくびさ  
 雷も似てとさましく中川平右衛門の体と見て  
 討手と仰付らま下二人の大將くの如し然とて  
 征伐延引及らん道理もなり今一度申て見ても

と大將の御前と伺へ近習小姓の面々列居るか  
 めろ只今御寝なり何とよても言上とへ便宜ふ  
 いと申て取合はさるハ兩人の大將たちも入魂  
 見てもとふのひ立ちの酒の香鼻をつらぬと倒  
 ちふ呼起ととも起も上らと平右衛門急度思ひ  
 直し獨言しける様あく我あつ過てり狭山の野  
 里の近よ就て御許をまこはを向ふて合戦  
 つるなり我等が所領も河内へ近し然ハ我等も近  
 さよより七御下知あくと向ふりりもの  
 らよりひなる道理と申て事く追延々はあま  
 今あらハハ城際も付あんののと後悔し近習

衆より向て申様野里り例もゆへの中川一族只今あり  
霧坂より罷向ひゆ後御沙汰のゆへん時より執  
申さるゝと傍より引廻り石田左吉よたの  
置つゝ平右衛門の取ものも取あへぬとの宿  
所へんを帰り一族即従り集め霧坂の追手は向  
そんと廻文とれとも一人も家より居合はぬとの不  
思議と秀春の常の座敷へ入て見ると鎧兜もあ  
ひあを大刀や刀を取ちり只今打立の様と見  
えよゆり厩を見るゆへこの日頃養ひゆひの名馬と  
も其数ありうたると一疋も見えさすは然り秀春霧  
坂へんを向ひいとたのこもさる天晴けあけゆる

大階言州終末二

七

振舞や瀬兵衛清秀の嫡子なり然り我等も向ふへ  
と鎧物具とりゆへとひ馬引寄てゆりりと打のり  
中間二人は腹當さと左右の小手とさうとて馬の  
口取て足輕は鎗のこを打出て見るとをい秀春と  
あゆと拍の紋の旗さうとをその勢六七十騎ゆ  
みと揉て河内路さうとて發向ひ平右衛門あれと見  
て鞭と鐙と合を馳たりしり秀春り勢も見うへ  
り見ゆへり打ゆとと遂に追付平右衛門聲うけて  
申様夫へ参るゝ秀春りゆへあは御許もあはと  
手勢と催ふゝ發向とるそ後の御勘當と何とり  
とるこたふむと聞もあは軍の場は向ふゆ

大階言州終末二

七



の生てりくらんとおのふのなほむの後のこと  
へ思ひもふらんと返答してあきり馬をとりめ  
けり平右衛門も少年のひさことされ實も戦場  
出るののち後の事と案して何と手柄のなる  
るを悔しは是等の事とめつらひ今迫近引  
たまとも秀春心たけくして中川の家光りと増  
てけり某う後見その詮あしとむららへ霧坂  
うけ向ひ勝ちこる手柄ありをけりさあぐ城  
めけ入一足も引を討るは二川の間と出ま  
しとおのひ切てを向ひけりめく其日もとて  
四時むらり大将御目と覺されあきつら霧坂

大陰言加勢

の討手のことと忘らう塩川蜂屋の何とせと  
尋あふ酔あて起もあうは大将うくと笑  
ををむひ高名手柄もさめその上の事とてその  
あひと宣ひしうの近習衆もおと  
まひや時過て出羽守目ととり起つて是  
いう霧坂と向ひて先登ととおのひつら爰  
大将の御次なりさく夕の酒のりよりつら  
して臥たるう時過されともや打立ん塩川  
めよせやと見返といわれも酔ふ前後も知  
やとあて諸共御大将と御暇申て打立ぬ



